

REPORT.Ⅱ

沿線を歩き、自然を楽しむ。

東武東上線の ハイキング。

長年にわたり自社沿線にハイキングコースを開拓、沿線の自然や地域の魅力を活かしながら、ハイキングの裾野を広げてきた東武鉄道。28年の歴史を持つ「東武健康ハイキング」は600回以上の開催を数える。また、東上線では春と秋に2大ハイキング大会を主催、全国から参加者を集めている。ここでは、東武鉄道のハイキングの歴史をたどりながら、2大ハイキング開催における東上線の取り組みを紹介する。



東武鉄道株式会社 鉄道事業本部
東上業務部 営業課長

佐川智明

Tomoaki SAGAWA



東武鉄道株式会社 鉄道事業本部
東上業務部 営業課 課長補佐

植木彩恵

Ayae UEKI

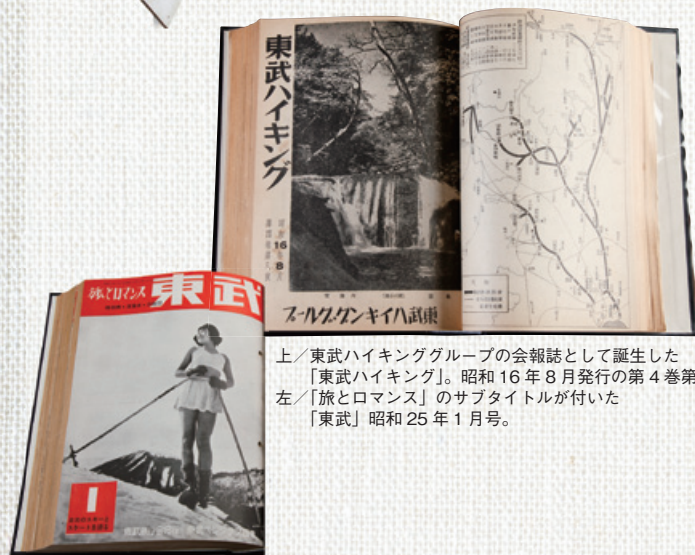


東武鉄道株式会社 鉄道事業本部
東上業務部 営業課

結城光正

Mitsumasa YUUKI

特集／沿線ハイキングと地域の活性化
「東武鉄道が目指す鉄道と地域の活性化」



上／東武ハイキンググループの会報誌として誕生した「東武ハイキング」。昭和16年8月発行の第4巻第8号。
左／「旅とロマンス」のサブタイトルが付いた「東武」昭和25年1月号。



左／昭和15年1月発行の「東武ハイキング」。
右／東武鉄道沿線のハイキングコースを紹介した「HIKING GUIDE」。 (昭和26年10月1日発行)

ハイキンググループの創設から始まる

東武鉄道のハイキングの歴史は、昭和初期までさかのぼる。

当時、世界的な流行を背景に日本でも都市部を中心にハイキングブームが起こり、都市近郊に路線を延ばす民鉄各社はコースや施設の整備を進め、ハイキングの誘致を盛んに行っていた。

そんな中、東武鉄道は、沿線のハイキング愛好家とともに「東武ハイキンググループ（T・H・G）」を創設。ハイキングコースの開拓・整備を進めるとともに、毎月のようにハイキング会を主催し、ハイキングの裾野を拡げていった。昭和13年には、日光の山の神様と呼ばれた故矢島市郎氏を編集に

迎えて、会報誌『東武ハイキング』を創刊。5000人の会員に、ハイキングプランや釣り情報、沿線ニュースを提供している。

当時を知る日本の女性登山家の草分け的存在で日本山岳会名誉会員だった故坂倉登喜子さんは、昭和61年に行われたインタビューで次のように語っている（『マンスリーとーぶ』昭和61年11月号）。

「昭和7、8年頃から東武さんとの付き合いが始まっていると思います。（略）とにかく私は奥武蔵、東上線の山が好きだったんです。（略）旅客課の方たちとお付き合いが始まって、土曜日になると、指導標を立てに行きました。私たちが旅客課に協力し

て、現在のハイキングコースと一緒に開拓したわけですね」

インタビューの中で坂倉さんは、昭和13年から15年頃に奥武蔵ハイキングの最盛期で、登山者のグループで車内は満員、乗り残しが出るほどだったと回想している。

しかし、戦局が進み、『東武ハイキング』は『東武健民』と改題して発行を続けたものの、昭和19年にはやむなく休刊。T・H・Gが活動を再開したのは、戦後の混乱もおさまり、社会も安定を見せ始めた昭和24年、「東武旅行会」と名前を改めての出発だった。

これを機に、会報誌も月刊『東武』の誌名で4月号から創刊、ハイキング、レジャー情報を中心とする総合誌的な会報誌に生まれ変わり、新たなスタートを切った。

また、同年10月号からは「旅とロマンス」というサブタイトルが加わり、「東武ペンクラブ」が編集を担当している。東武ペンクラブとは、東武沿線に住んでいる、あるいは東武沿線にゆかりや愛情をもっている作家、詩人、写真家、画家が集まったペンクラブだ。詩人の三ツ村繁を中心に、写真家の土門拳、画家の原精一など（いずれも故人）、そうそうたるメンバーが顔をそろえ、誌面の充実を力を注いでいた。

現在の東武鉄道の広報誌『マンスリーとーぶ』は、何回かのリニューアルを経つつ、この『東武』創刊号から通刊しており、今年の12月号は第

740号を数える。

「東武健康ハイキング」の開始

その後、幾度かのブームの波があり、ハイキングは自然を楽しむレクリエーションとして根づいていった。東武鉄道でも、旅客誘致の重要施策の一つとして、沿線の自然や観光資源を活かしながらハイキングの開催を続けていった。そして現在、定期開催されているのが、東上線と本線（伊勢崎線・日光線・野田線）の両線で、毎回数千人規模の参加者を集めて行われる「東武健康ハイキング」だ。

東武健康ハイキングの歴史は、28年を数える。その第1回は、昭和57年1月21日に東上線・寄居駅で開催した外秩父ハイキングだ。参加者121人のスタートだった。

「本線は日光、鬼怒川という大きな観光資源を持っている。東上線には関東三大蔵町の川越があるが、それだけでは観光資源として弱い。われわれが『外秩父』と呼ぶ関東山地の豊かな自然を、もっと活用すべきだと考えた。当社にはハイキングの伝統と実績がある。沿線の自然を観光資源に、旅客誘致策として『東上線のハイキング』を強く打ち出していこうということから始まった」と、東武鉄道株式会社鉄道事業本部東上業務部の佐川智明営業課長は語る。

翌58年4月には、本線・新大平下駅

で、太平山・晃石山ハイキングを開催。224人が参加し、本線でも東武健康ハイキングがスタートした。

「初期の頃は事前応募制で、往復はがきで参加を申し込んでいた。スタッフは先頭に立ち、隊列を組んで歩く。コース途中で人員を配して、後続の参加者を誘導する。深い山道を歩くことも多かったため、安全管理には万全の体制を敷いていた」と佐川課長は言う。

しかし、徐々に申し込みが上限の1000人を上回るようになり、断られた参加希望者から「なぜ参加できないのか」と不満の声が挙がるようになった。そこで、本線は第187回（平成14年10月19日）から、東上線は第243回（平成15年3月15日）から、一部のコースを除き、当日に受付で申し込む自由参加制に切り替えている。

自由参加制になると、参加者が急増し、平成16年には両線とも1回の参加人数が2000人を超えるようになった。この参加人数ではさすがに隊列歩行はできなくなり、サポート面については、出発地点からゴール地点まで、要所にスタッフを配置して参加者を見守るオペレーションシステムに切り替え、安全を確保している。

また、それまでは標高3000〜8000m級の山行がメインだったが、「やさしいコースを歩きたい」という参加者が多くなったこともあり、低山やタウンウォーキングにプログラムを

移行しているようだ。

参加者の9割がリピーター

東武健康ハイキングでは、東上線と本線で、それぞれの沿線特徴を活かしたコースづくりが行われている。本線は名所旧跡めぐりやタウンウォーキング、東上線は季節の花めぐりや自然を楽しむコースが多い。コースは、歩く距離や所要時間、平地から軽い登山までの難易度によって、レベル1からレベル3まで分類されており、参加者は自分の体力に合わせて選べるようになってきている。

平成22年度の開催回数は両線合わせて19回。22年度末までの通算では、本線で290回、東上線で322回、開始以来600回を超える。以前は、本線と東上線のハイキング開催日が重なることもあったが「両方参加したい」という声を受けて、21年からは開催日のすり合わせを行うとともに、両線の開催案内を統一して実施するようになっている。平均参加人数は、およそ2000人だが、コースによっては3000人近くに膨らむことも少なくない。中でも東京スカイツリーにちなんだハイキングには、約5000人もの人が参加したという。

「これまでお客さまの声を反映しながら、試行錯誤を重ねて実績を積み重ねてきた。毎年、新たなコースを組み入れ、バリエーションを増やすように努

力している」と佐川課長は語る。

参加者のリピーター率も9割とずば抜けて高い。その秘密は「Happy 7」というスタンプカードで、ここにも東武鉄道の工夫が見てとれる。

19回開催されるハイキングに7回参加し、毎回完歩してゴールでスタンプの押印を受けると記念品がもらえるとある特典で、現在プレゼントしているのは保温機能付きの水筒かボディバッグ。いずれもハイキングの必需品だ。

実際、「スタンプを貯めることを励みに頑張っている」と言う人が多く、「体調が悪いのに無理をして参加することがないように」（佐川課長）、21年まで9つだったスタンプ数を22年からは7つに減らす配慮をしたほどの人気ぶりだ。

ところで、平成22年度の東武健康ハイキングで目を引くのは、東上線の8回のハイキングのうち2回が秩父鉄道との共催企画であることだ。どちらも東

上線、秩父鉄道線双方を乗車するようにコースが組まれている。

こうした他社との共催企画は、東武健康ハイキング以外のハイキングプランとして、年を追うごとに増えているという。秩父鉄道以外にも相互直通運転のネットワークを活かし、西武鉄道や東急電鉄と共催でハイキングやウォーキングイベントを開催。相互誘客を図り、鉄道そのものの活性化を目指している。

舞台裏でのスタッフの苦勞

安全でスムーズに大会を運営し、楽しいハイキングを提供するために、ス



①外秩父七峰縦走ハイキング大会の前日、山道の雪かきに精を出すスタッフ。
②参加者で混み合う小川町駅のホーム。③手書きでコース変更を知らせる案内板。



特集
沿線ハイキングと地域の活性化
〔東武鉄道が目指す鉄道と地域の活性化〕



大会前の季節外れの大雪で、急きょコースがショートカットされて開催された第25回外秩父七峰縦走ハイキング大会。当日は晴天に恵まれた。

タッフは参加者の目には見えないところで、地道な努力を重ねている。

一つは、ハイキングコースの事前の準備だ。おおむね3回は歩き、入念なチェックを行う。

「1回目は、コースの見所や地域の特徴をリサーチし、自治体などと打ち合わせをして情報収集を行う。それらを基にコースをつくり、2回目は実際に歩いてみる。コースは、途中で人が人などが出た場合も考えて、近くに車道がある場所を選定している。最後は開催の前日に必ず歩き、道が確保されているか、危険性はないか、チェックを行う」と、東上業務部営業課の結城光正氏は語る。

結城氏自身、1年間に50回程度、コースを歩く。22年は、全国的に蜂の被害が多かったため、蜂の巣の有無については特に注意を払ったそうだ。

また、参加者の間では「東武鉄道のハイキングは他の大会よりもスタッフ数が多くて安心」という定評がある。

佐川課長によれば「ポイントとなる地点にスタッフを配置している。特に道路を横断する場所や迷いそうな場所には必ずスタッフがついて、参加者に安心していただけるようにしている」そうだ。東武健康ハイキングの通常の大会で

は、15人程度が配置につく。

一方、開催地への配慮も怠っていない。参加者にはゴミの持ち帰りの注意を呼びかけ、住宅地では事前に一軒一軒挨拶に出向くこともあるという。

こうした主催者側の努力や配慮は、参加者にも十分通じているようだ。東武鉄道には「楽しかったのでもた参加したい」という声が多数寄せられている。東上業務部営業課の植木彩恵課長補佐は、「ハイキングに参加して東上線の良さを知り、定年後に沿線移住した方から、週末は夫婦でひと駅ずつハイキングを楽しんでいるという手紙をいただいた。ハイキング事業に携わってきて本当によかった」と語っている。

春の外秩父七峰縦走ハイキング大会

東上線では、東武健康ハイキングのほか大規模な大会として、春の「外秩父七峰縦走ハイキング大会」と、秋の「武蔵おごせハイキング大会」を主催している。

昭和61年に始まった外秩父七峰縦走ハイキング大会は、東武鉄道が実施するハイキングイベントのサポートをしていた新ハイキング社の発案によるものだ。当時盛んだった神戸の「六甲山縦走ハイキング」の関東版を企画、東上業務部が企画の具体化や各種調整、準備を行い、開催が決まった。コース途中に何カ所かチェックポイントを設

け、制限時間内にコースを完歩するラリー形式で行うのが大きな特色となっている。

コースはフルマラソンとはほぼ同じ約42km。小川町駅前をスタートして、7つの山の尾根を歩き、寄居駅近くの鉢形城歴史館でゴールする。完歩賞として、その年または2連続参加で完歩した参加者には、毎年グリーン色の帽子がプレゼントされるが、22年は25周年を記念して特別にオレンジ色の帽子が用意された。

その記念すべき第25回——大会は、始まって以来のアクシデントに見舞われた。前々日から前日にかけて、季節外れの大雪が降ったのだ。前日、コースを回った結城氏ら緊急出動した10人のスタッフは、山道の雪かきに取り組んだ。外秩父七峰縦走ハイキング大会は、全国から参加者が集まる。42kmを完歩するために、日頃からトレイニングを積んで、その日に臨む。遠方からの参加者はもちろん前泊もしている。

「そうしたお客さまのことを考えると、とても中止にはできない。苦肉の策で、コースを35kmにショートカットした」（結城氏）

佐川課長も「最終的なコース決定は前日の午後5時。それからスタッフの配置変更と移動などのスケジュールを組み直し、深夜までかかって臨時の手書き立て看板を作成した」と振り返る。

4月18日当日は、幸い晴天に恵まれ

た。駅やホームの案内テロップで開催を確認してから小川町に来た人も多かったため、スタートのピークが多少ずれ込んだが、それでも6085人が参加した。

要所で誘導するスタッフは約90人。時間になったら別の場所に移動するなど、配置場所を刻々と変えていく。また10台以上の車が待機し、スタッフ移動やけが人発生などのトラブルに備えた。参加者がすべて下山した後には、スタッフがアンカーとして指定地まで歩き、最終確認する。

「参加者の自己責任を前提としながらも、必ず安全確認することや、危険・トラブルに備えて要所で待機するのはやはり鉄道会社らしい姿勢」と佐川課長は語る。

大会は、東上業務部の臨機応変な対応で、無事終了した。新緑と桜の花と雪を愛でることができた、珍しい大会となった。また、コースが短縮されたこともあって、参加者の8割近くが完歩という嬉しいおまけもついた。

一方、コースがある小川町、東秩父村、寄居町とそれぞれの観光協会、近隣のときがわ町は、大会に協力して、チェックポイントやゴール地点で、湯茶のサービス、食事や特産品の出店を行った。こうした地元の協力が賑わいをつくり出す。直前にコース変更があったため、出店場所の移動もあったそうだが、舞台裏の苦労が表に出ることはなく、地元の「おもてなし」に参



武蔵おごせハイキング大会の終盤、越生町の里を歩く。



参加賞にブルーのオリジナルTシャツが贈られた
おごせハイキング大会。

また、東武鉄道主催のハイキング大会は基本的に無料で、参加賞や抽選でもらえる賞品、完歩賞品、スタンブラー賞品など、プレゼントを楽しみにしている参加者も多い。おごせハイキング大会の参加賞はオリジナルTシャ

ツだったが、スタート地点で受け取り、さっそくその場で着ている人の姿も見かけた。
こうした参加者が帰宅するのを見届け、「最後はスタッフが円陣を組んで挨拶する」（植木課長補佐）頃には辺りは真つ暗だという。前夜遅くまで準備し、当日は早朝から稼働。22年は2大会とも天候に悩まされたが、スタッフの尽力で無事終わった。
今後の課題は、参加世代をどのよう

「コースが長い大会では、最後にスタッフが車で後追いをし、歩いているお客さまに『車に乗りますか』と声をかける。しかし、『最後までできるだけ自分の足で歩きたい』と答える方が多い。それに声かけただけで元気になってくれるお客さまもいる」と植木課長補佐は語り、「いろいろな参加者がいて、それぞれが苦労して、たどり着く喜びがある。まさにドラマだと思う」と結城氏は続ける。
ハイキングの醍醐味は、一人あるいは仲間と、山や里、街を自らの足で歩き切る達成感にある。「そうしたお客さまの気持ちをくみ取りながら、運営していきたい」と佐川課長も語る。
春と秋のこの2大会は事前申し込み制だが、毎年参加するファンも多く、受付開始後早々に定員に達する人気だ。

東上線沿線のハイキングは、東上業務部と沿線の現業が総出で取り組み、実績を積み上げてきた。「担当者が変わっても、そのノウハウはしっかりと引き継がれている。より多くの方に参加していただけるように工夫を重ねながら、楽しく安全なハイキングを主催していきたい」（佐川課長）
鉄道事業者としての責任と自負をもって推進される、ハイキングという地域活性化策。長い伝統はこうした努力によって、さらに積み重ねられていくのだろう。

加者も満足げだった。
秋の武蔵おごせハイキング大会
秋の「武蔵おごせハイキング大会」は12回を数える。日本市民スポーツ連盟公認の大会だ。
平成11年に東武美術館（平成12年閉館）で「役行者と修験道の世界展」が企画された際、日本歩け歩け協会（現日本ウォーキング協会）から、役行者像にちなんだハイキング大会を越生町で開催してはどうかと持ちかけられた。その昔、役行者が越生町の黒山三滝を修験道の道場として開いたことから、黒山三滝に役行者像が建てられているという。

東武鉄道が越生町に呼びかけ、同年9月12日、「武蔵越生・役行者ウォーキング大会」が実現した。以後、名称を変え、現在に続いている。
またもう一点、七峰縦走と大きく異なるのは、大会が越生町との共催であることだ。スタートとゴール地点は町の中央公民館前の駐車場が提供された。さらに、スタッフとして越生町役場職員が24人参加。総勢約60人のスタッフで当日の運営にあたった。
22年の開催日は10月31日だったが、春の七峰縦走に続いて、秋も異常気象の影響を受けた。前日に関東地方を、例年より一カ月ほど遅い台風が直撃したのだ。当日未明までに台風は抜け、大会は中止とはならなかったが、前日

おごせハイキングは、七つの山の尾根を歩く七峰縦走と比べれば、高低差は小さいものの、黒山から比較的険しい山を登り山道を歩く、全長27kmの長いコースだ。体力に合わせて参加できるように、険しい山道をカットした17kmコース、ファミリーで歩ける7kmコースも用意している。
またもう一点、七峰縦走と大きく異なるのは、大会が越生町との共催であることだ。スタートとゴール地点は町の中央公民館前の駐車場が提供された。さらに、スタッフとして越生町役場職員が24人参加。総勢約60人のスタッフで当日の運営にあたった。
22年の開催日は10月31日だったが、春の七峰縦走に続いて、秋も異常気象の影響を受けた。前日に関東地方を、例年より一カ月ほど遅い台風が直撃したのだ。当日未明までに台風は抜け、大会は中止とはならなかったが、前日

「コースが長い大会では、最後にスタッフで車後追いをし、歩いているお客さまに『車に乗りますか』と声をかける。しかし、『最後までできるだけ自分の足で歩きたい』と答える方が多い。それに声かけただけで元気になってくれるお客さまもいる」と植木課長補佐は語り、「いろいろな参加者がいて、それぞれが苦労して、たどり着く喜びがある。まさにドラマだと思う」と結城氏は続ける。
ハイキングの醍醐味は、一人あるいは仲間と、山や里、街を自らの足で歩き切る達成感にある。「そうしたお客さまの気持ちをくみ取りながら、運営していきたい」と佐川課長も語る。
春と秋のこの2大会は事前申し込み制だが、毎年参加するファンも多く、受付開始後早々に定員に達する人気だ。

「コースが長い大会では、最後にスタッフで車後追いをし、歩いているお客さまに『車に乗りますか』と声をかける。しかし、『最後までできるだけ自分の足で歩きたい』と答える方が多い。それに声かけただけで元気になってくれるお客さまもいる」と植木課長補佐は語り、「いろいろな参加者がいて、それぞれが苦労して、たどり着く喜びがある。まさにドラマだと思う」と結城氏は続ける。
ハイキングの醍醐味は、一人あるいは仲間と、山や里、街を自らの足で歩き切る達成感にある。「そうしたお客さまの気持ちをくみ取りながら、運営していきたい」と佐川課長も語る。
春と秋のこの2大会は事前申し込み制だが、毎年参加するファンも多く、受付開始後早々に定員に達する人気だ。

「コースが長い大会では、最後にスタッフで車後追いをし、歩いているお客さまに『車に乗りますか』と声をかける。しかし、『最後までできるだけ自分の足で歩きたい』と答える方が多い。それに声かけただけで元気になってくれるお客さまもいる」と植木課長補佐は語り、「いろいろな参加者がいて、それぞれが苦労して、たどり着く喜びがある。まさにドラマだと思う」と結城氏は続ける。
ハイキングの醍醐味は、一人あるいは仲間と、山や里、街を自らの足で歩き切る達成感にある。「そうしたお客さまの気持ちをくみ取りながら、運営していきたい」と佐川課長も語る。
春と秋のこの2大会は事前申し込み制だが、毎年参加するファンも多く、受付開始後早々に定員に達する人気だ。

「コースが長い大会では、最後にスタッフで車後追いをし、歩いているお客さまに『車に乗りますか』と声をかける。しかし、『最後までできるだけ自分の足で歩きたい』と答える方が多い。それに声かけただけで元気になってくれるお客さまもいる」と植木課長補佐は語り、「いろいろな参加者がいて、それぞれが苦労して、たどり着く喜びがある。まさにドラマだと思う」と結城氏は続ける。
ハイキングの醍醐味は、一人あるいは仲間と、山や里、街を自らの足で歩き切る達成感にある。「そうしたお客さまの気持ちをくみ取りながら、運営していきたい」と佐川課長も語る。
春と秋のこの2大会は事前申し込み制だが、毎年参加するファンも多く、受付開始後早々に定員に達する人気だ。

「コースが長い大会では、最後にスタッフで車後追いをし、歩いているお客さまに『車に乗りますか』と声をかける。しかし、『最後までできるだけ自分の足で歩きたい』と答える方が多い。それに声かけただけで元気になってくれるお客さまもいる」と植木課長補佐は語り、「いろいろな参加者がいて、それぞれが苦労して、たどり着く喜びがある。まさにドラマだと思う」と結城氏は続ける。
ハイキングの醍醐味は、一人あるいは仲間と、山や里、街を自らの足で歩き切る達成感にある。「そうしたお客さまの気持ちをくみ取りながら、運営していきたい」と佐川課長も語る。
春と秋のこの2大会は事前申し込み制だが、毎年参加するファンも多く、受付開始後早々に定員に達する人気だ。

「コースが長い大会では、最後にスタッフで車後追いをし、歩いているお客さまに『車に乗りますか』と声をかける。しかし、『最後までできるだけ自分の足で歩きたい』と答える方が多い。それに声かけただけで元気になってくれるお客さまもいる」と植木課長補佐は語り、「いろいろな参加者がいて、それぞれが苦労して、たどり着く喜びがある。まさにドラマだと思う」と結城氏は続ける。
ハイキングの醍醐味は、一人あるいは仲間と、山や里、街を自らの足で歩き切る達成感にある。「そうしたお客さまの気持ちをくみ取りながら、運営していきたい」と佐川課長も語る。
春と秋のこの2大会は事前申し込み制だが、毎年参加するファンも多く、受付開始後早々に定員に達する人気だ。

「コースが長い大会では、最後にスタッフで車後追いをし、歩いているお客さまに『車に乗りますか』と声をかける。しかし、『最後までできるだけ自分の足で歩きたい』と答える方が多い。それに声かけただけで元気になってくれるお客さまもいる」と植木課長補佐は語り、「いろいろな参加者がいて、それぞれが苦労して、たどり着く喜びがある。まさにドラマだと思う」と結城氏は続ける。
ハイキングの醍醐味は、一人あるいは仲間と、山や里、街を自らの足で歩き切る達成感にある。「そうしたお客さまの気持ちをくみ取りながら、運営していきたい」と佐川課長も語る。
春と秋のこの2大会は事前申し込み制だが、毎年参加するファンも多く、受付開始後早々に定員に達する人気だ。